

日記ろまん

第61号

女性の日記から学ぶ会
代表 島 利栄子

〒276-0046
千葉県八千代市
大和田新田 469-123
TEL・FAX 047-459-9464

事務局

二十周年をめざして



活動始まる

代表・島 利栄子



会員皆様お待ちかねの「十九周年のつどい」は六月十三日(土)に決まり、早くも準備が始まりました。テーマは「戦中戦後の日記に学ぶ」。前年度日記塾で発表された五人の研究を中心に展示、講話で戦争をめぐる庶民の暮らし・生き方を様々な角度で考えてみたいと思います。

また好評連載の内に今号で最終回を迎えた古川喜代子さんに講演・展示をお願いしています。多くの会員の皆様にお会いできますことを楽しみにしております。

また来年は二十周年を迎えます。活動の歴史を振り返り反芻しつつ、新たな展望を考えねばならない時です。二十周年記念事業を二つ計画し、新たな準備を始めました。

★二つの事業

一つは当会が保存する日記資料の目録化です。青年部の田中祐介さんの科学研究費をあてて貰い、島宅にある約三千点の日記資料を一つ一つ点検し、目録を作成して全貌を把握しようというものです。昨年九月より始めてすでに五回を重ねました。月一回島宅に青年部を中心に十人ほどがパソコン持参でみえ、熱心に一日六時間の作業に取り組んでいます。

もう一つは会の二十年間の活動をまとめようというものです。「日記ろまん」のバックナンバー(すでに六十一号)を開き、日記塾(すでに七十七回)の資料を紐解き、山の様な写真や展示物と格闘しています。スタッフは月一回島宅に集まりコツコツと作業を開始しました。これも昨年九月より開始、

すでに五回を重ねました。

★今後の展望

島宅は手前までですが、時には二十名を超える会員が集まり、地道な根気のいる作業を通して、従来活動の中心であった熟年層と青年部などの若い人達が交流を深め、自然体で理解し合う場が構築されるのは素晴らしいことで



す。激論が交わされ、笑い声が溢れ、世代間の譲りとはこのようなものなのだと思えます。ずっと夢みてきた「日記の館」の姿もこのようなものでありたいと思います。
二十周年には二つの事業をやり遂げ、会員の皆様と共に祝いあえるように頑張っていく所存です。どうか皆様のさらなるご支援をお願い致します。



島宅でにぎやかに



2014/12/10



平成26年
 研修会・ちよつと早めの忘年会
 市川八幡周辺



古い歴史と文学の町
 松本 喜美子

今年の「ちよつと早い研修・忘年会」は十一月十二日、千葉県市川市八幡地区周辺を訪ねました。市川は東京の隣、土代には下総国の国府として文化政治の中心地であり、江戸時代には江戸川、利根川の舟運河港として江戸への出入りで賑わい、大正から昭和にかけては多くの文化人や文士も住み、また陸軍の軍事施設も置かれて軍都としても栄えました。現在は都心へ三十分という便利さと緑の多い環境が人気のベッドタウンでもあります。

参加者約二十名、地元ボランティア



水木洋子邸内



公孫樹の巨木

アガイドさんの案内でまず「八幡の敷不知」へ。今は小さな茂みですが昔は大きな森で入ると平将門の祟りで出られなくなるという伝説が伝えられています。京成電車の踏切を渡って松の大本が所々に残る住宅地を「水木洋子邸」へ向かいました。昭和三十年頃映画やドラマの脚本家として活躍した水木洋子は市川を愛し「ひめゆりの塔」「浮雲」「女の一生」などたくさん名作がこの家で生まれました。

和洋折衷の家には家具や衣類、食器などもそのまま、当時の日本人の暮らしを彷彿とさせます。ここでもボランティアの方々親切に説明してくれました。次に訪れたのは葛飾八幡宮、寛平年間、今から千年以上も前に京都の石清水八幡宮を分祀したのが始まりとか、源頼朝も武運長久を祈ったという下総第一の鎮守社です。千本いちよつと呼ばれる境内の公孫樹の巨木は天然記念物に指定され、天保年間に出された「江戸名所図会」にも記述が見えます。古い社、一面の黄色い公孫樹の落葉と大輪の鉢が並ぶ菊花展、これぞ日本の秋の鎮守様という風情でした。



女性の日記から学ぶ会
 平成26年11月12日市川

水木洋子邸前にて

この近くに住んでいたのが永井荷風です。晩年を過ごし最後は今という孤独死状態で発見された家や、その頃足繁く通っていた和食堂の大黒家、老作

家を偲びつつ細い路から眺めました。大分歩いてお腹も減ってきた頃、忘年会場のレストラン「味雅」に到着、今年一年への感謝と来年への精進を願って乾杯！ 美味しい中華料理を頂きながら次から次へと話が弾みました。特別参加？の小園会員の長女楓子ちゃん（一歳）も持参のベビーフードで上機嫌、皆の人気を独占していましたね。食事の後は御当地市川に因んだクイズ。「市川を通る鉄道（J・R、私鉄等）は何本？」「三本！」「四本だろ？」「武蔵野線だつてあるぞ！」「東葉高速だつて……まさに侃々諤々、正解は六本でした。一同あらためて首都圏の交通網の発達にびびり、まだまだクイズは続きそれぞれの質問に正解した人は景品をゲットしてニコニコ顔でした。いろいろ楽しい企画を考えて下さった幹事さんありがとう！

今年には毎月の例会にも新会員が増えて嬉しいことですが、来年はこの研修・忘年会にもぜひ御参加下さいね。それでは皆さん「こぎげんよう！」。

PS 私事で恐縮ですが市川は私の祖父母が晩年を送った所で、七十年前小学生の私は毎年夏休みには兄弟とさんぽを追いかけたり真間川で釣りをしたり田園生活を満喫しました。久方ぶりの市川は駅周辺にはタワーマンションが並び、小さな店が軒を並べていた一画はきれいな広場が変わっていつであらためて時の流れを実感した一日でした。

連載

1

「女性の日記から学ぶ会」二十年の歩み

未来に続く活動をめざして

《創立（平成八年）そして初期の頃》

島 利栄子

★創立のいきさつ

私は昭和五十八年頃から聞き書きを始めた。その中で自分の書いた日記の処分に困っている方に相談され、その記録の素晴らしさに打たれて「捨ててはいけない!」と自分がお預かりしようと思いついた。平成八年「地域新聞」の取材に「仲間がほしい」と話した。それが記事になり五名の方から電話を貰った。現事務局長・片岡良美さんもその一人だ。更に私の親友五名を誘い、その年の五月、合計十人で準備会を足させた。月一回島宅に集まり昼食を共にしつつ日記読み解き、活動の基本作りを話し合い、同志的な思いを深めていった。全国的に仲間を集めよう、そのために「つどい」を催そうと意見がまとまった。会の名前は「女性の日記から学ぶ会」に決め、「学ぶ」に日記から教えて頂くとの思いを込めた。

のお一人だ。更に私の親友五名を誘い、その年の五月、合計十人で準備会を足させた。月一回島宅に集まり昼食を共にしつつ日記読み解き、活動の基本作りを話し合い、同志的な思いを深めていった。全国的に仲間を集めよう、そのために「つどい」を催そうと意見がまとまった。会の名前は「女性の日記から学ぶ会」に決め、「学ぶ」に日記から教えて頂くとの思いを込めた。

★基本方針が決まる

「プライベートな日記を果たして預ける人があるか?」「寄託・寄贈文書を交換すれば安心なのは」「会則や会報を作り遠方の会員と繋がる」など意見が出て一つ一つ決めていく中で、庶民日記を収集・保存・研究する活動が日本でも珍しいことを知り頑張ろうと意を強くした。

会報の名前は「日記ろまん」。準備会は初代事務局長・新井仁美さんの手作り。編集部は木更津の姫三人も加わってくれることに。定例会、つどいの会場は八千代市のご好意で、八千代台東南公共センター四階「女性センター」(現・男女共同参画センター)をお借りできるようになったのはありがたかった。こうして一周年のつどいを迎えることになった。

★一周年から四周年のつどいまで

平成九年五月十四日(土)「つどい」雨の中、百人。和やかで熱気あり。私も割合落ち着いて話せた。皆集中して聞いてくれ気持がよかった。懇親会も楽しかった。夜は三人が我が家に泊まる。山口県からの永野さんも一緒に遅くまで話す。気持ちが昂り眠れず(利栄子日記より)。

清水幸子さんが紅白の幕を持って来、祭り気分を盛り上げ、伊藤久恵さんが沢山のバラの花を飾ってくれた。私は夏帯でコースターを作り記念品にした。温かいつどいになった。

平成九年六月十三日「一回日記塾」

「地域新聞」の記事



準備会・島宅所で



展示風景。三周年のつどい。吉田得子日記・翻刻ノートなど初展示

4周年のつどい



京都文京大学教授西川祐子さん「日記帳の歴史」



ドラマに出演、伊藤久恵さん



日本日記クラブ会長・小谷信子さんと対談

二十五人参加。何とか無事に終わった(利栄子日記より)。史料班、会報発行も順調に進み会員も百人に達した。

肝心な日記も信濃毎日新聞「女の歲月」連載のための取材などを通して「松崎宗子日記」「吉田得子日記」「小林艶日記」「新藤五十鈴日記」「笠原徳日記」など会の宝になる貴重な日記との出会いが続く。珍しさ故か、はじめから多くのマスコミの方に紹介して頂いた。

「二周年のつどい」「三周年のつどい」「四周年のつどい」まで毎年新しい試みに挑戦し多彩なゲストもお招きした。またこの時期に、現在も活動の中心となる西村榮雄、松本喜美子、中野祐子さんなどパワフルな会員が加わった。展示は二代目事務局長・菊池敦子さんの手で美しい形が整っていった。(次号に続く)



「松崎宗子日記」

を読む

— 平成期の宗子さん —

片岡 良美

松崎宗子さん(松本市)の日記は昭和十八年、三回目の出征をした夫誠さんとの手紙のやり取りの備忘録から始まっている。以来「くなる」前年の平成十二年まで六十数冊書き継がれた。

今回は、平成期の日記からみる宗子さんの生活を紹介する。

はじめに、これまでの読み解きから、宗子さんの生活を、日記からおおまかにたどってみよう。

《戦中、戦争直後》

昭和十八年～二十二年
宗子さん二十七～三十一歳

当初は頻繁に行っていた戦地との手紙のやりとりだが、戦況の悪化に伴いそれもかなわず。戦地の夫を気遣う不安な気持ちとどこどこに綴られる。障子紙などを綴じた帳面を使用。

《家族で農業に従事》

昭和二十三年～二十四年
宗子さん三十二歳～四十三歳

二十一年夏に戦地から無事戻った誠さんを交えて、山仕事、農業、養蚕と家族でいそいそと日々が描かれる。大学ノートを見開きに一月月として、一日一行の記録と支出簿を記す日記の書き方がこの時期に始められた。

《社会活動、趣味の場へ活躍》

昭和二十五年～四十七年
宗子さん四十四歳～五十八歳

この時期、夫の誠さんが会社に勤務し始め、長女も就職。二女の学校のPTA活動を皮切りに婦人会、地区会、また最も力を注いだ軍人恩給活動に関わり、指導者として活躍。自身も職を持つ傍ら、詩吟、扇舞を修練。

《夫の誠さんの死》

昭和四十八、九年
宗子さん五十七、五十八歳

誠さんが倒れ、入院。活動、仕事を休止して看病に専念。病床日記をつけ、七回忌に私家本『黄水仙』出版。

《再び積極的に社会参加》

昭和五十年～六十二年
宗子さん五十九歳～七十二歳

誠さんの死後、仕事や各種活動、趣味を再開。孫の誕生に伴い、家庭での役割もふえるが、婦人会、ボランティア、軍人恩給活動もさらに活発に。新たに、老人福祉施設松風園への慰問を開始。趣味は、弓道、日舞、民謡、書道と幅広く行っている。



日記原本(平成11年8月)

これまで自分のために書き続けた宗子さんが、平成四年、地域の民俗誌の執筆を依頼され、以後戦争体験などの原稿を

そして宗子さん七十三歳の年の一月平成と改元。この時期も、大学ノートに一日一行の記録という形式は変わらないが、書かれた内容が増え、法事や交際など様々な生活全般の覚書も細かく記されている。年中行事については、これまでと同様、詳しく記載されており、宗子さんが行事を大切に守り続けていることがわかる。また、畑仕事や大好きな花づくりも続けている。その他のことがらを日記から拾い、年ごとにまとめて宗子さんの生活を概観した(左ページ参照)。それをもとに、平成期の宗子さんを考えてみよう。

①趣味を社会貢献にいかす
平成元年、軍人連盟の支部長を退任し、軍人恩給活動の第一線から退く。代わって、老人クラブや地区文化祭の場で、踊りを披露したり、書を出品したりと、趣味を通しての社会貢献に努めている。松風園へは二十年近くも贈り物を携え慰問を続け、入居者と交流を重ねた。

②書くことへの意欲
これまでも自分のために書き続けた宗子さんが、平成四年、地域の民俗誌の執筆を依頼され、以後戦争体験などの原稿を



書く機会が増える。日記からも根を詰めて机に向かう様子が窺える。

③日記が注目され、当会との交流開始

平成八年一月、宗子さんの日記が地方紙で紹介される。それを機に島代表との出会いがあり、当会との関わりがスタートした。日記にも「島先生」の名が非常に多く見られ、「書くことが生きがいだった」という宗子さんにとって、島代表や当会の存在が晩年の支えであったことを思うと、改めて感慨を深くする次第である。

④心情の吐露

平成期になると、一日一行のなかに、行動の記録だけでなく、感情を綴ることも増えてきた。ノートのあいているページに自作の短歌や、随想、また絵なども多くを書いている。

⑤身体の不調に悩む

平成十三年十月、くも膜下出血で亡くなられた宗子さんだが、平成期の日記には、体調の記載がたたくさん見られる。特に、腰痛、膝痛に悩まされ、何度も入院。活発な宗子さんゆえ、思うように身体が動かないことの辛さはいかばかりであったろう。しかし、最晩年まで筆をとり続けた宗子さんに心から敬意を表したい。

イラストは宗子さん画



平成期の日記からみる 宗子さんの生活
(多年継続している年間行事、畑仕事、花づくり等以外の活動を取りあげた)

平成 (西暦) 満年齢	諸活動 (() 内は日記に 書かれた回数)	トピックス 「太字」内は日記の原文
元年 (1989) 73歳	老人クラブ (22) 選挙応援 (4) 農協関連 (7) 村の行事 (6) 松風園 (12) 軍恩 (6)	・軍恩活動の第一線から退く (松本支部婦人部長退任)。 ・9月に腰痛 (腰椎ヘルニア) 入院。 ・昭和天皇崩御、平成と改元「1/8 世の中の 時世変われど 変わらぬものは 松のみどりの 永遠に 変わらじ」
2年 (1990) 74歳	老人クラブ (3) 軍恩 (2) 選挙応援 (3) 農協関連 (2) 松風園 (19) 通院 (113)	・誠さん 17 回忌。 ・右手骨折入院 (2月～5月)。…リハビリのため、各種活動は制限。しかし、足は大丈夫であったため、松風園へは頻回訪問。
3年 (1991) 75歳	老人クラブ (12) 軍恩 (4) 松風園 (12) 通院 (46)	・2月に腰椎の検査。腰痛で寝込むこと多し。書き物、書道に励む。 ・脳梗塞で入院 (10月～12月)。「病院の窓から見る故郷のいかにおはすや」
4年 (1992) 76歳	老人クラブ (15) 軍恩 (2) 地区文化祭 (踊り) 松風園 (9) 通院 (21)	・入山辺宮原神社御柱見立て、山出し (二女の夫久さん年番)。 ・10月「出張所の教育委員会へいく」…入山辺地区の民俗についてまとめて刊行する事業についての説明か。(平成8年『山家民俗誌』が刊行される)
5年 (1993) 77歳	老人クラブ (15) 軍恩 (4) 地区文化祭 (踊り) 老人大学 選挙応援 (2) 松風園 (11)	・入山辺宮原神社御柱祭り (久さん年番)。 ・民俗誌刊行に向けて3月に会議が招集。宗子さんも執筆陣の一員として会議に参加。原稿書きに追われる。
6年 (1994) 78歳	老人クラブ (17) 軍恩 (2) 地区文化祭 (踊り) 敬老会 松風園 (11) 踊りを見るに	・精力的に原稿書きに取り組み、12月に提出。そのためか、以前骨折した右手の痛みが続く。 ・自宅に大きな夕顔が咲き、松本の地域紙「市民タイムス」、テレビの取材を受ける。
7年 (1995) 79歳	老人クラブ (7) 軍恩 (4) 地区文化祭 (踊り) 敬老会 松風園 (16) 通院 (67)	・膝の痛みが激しく、水を抜く治療を続け、12月末には転倒して入院。 ・民俗誌執筆が契機か、行事の記載が詳しくなる。「1/18 蜂粥にて、十五日の朝神棚各神様にお餅粥を下げ、火にあぶり焼いて食(一年中毒虫にササれないと言ふ)」
8年 (1996) 80歳	老人クラブ (10) 老人大学 地区文化祭 松風園 (12) 通院 (29) ※鳥代表の名 (12)	・松風園の園歌を作詞、曲をつけてもらい、テープを作成、多くの知人に贈る。 ・1月、宗子さんの日記が、「市民タイムス」に紹介される。島代表との出会いがあり、6月には松本での島代表の講演会に宗子さんも同行。 「2/11 千葉から島先生来る。一日たのしい話が出来た」 「5/20 島先生より電話あり。嬉しかった」
9年 (1997) 81歳	老人クラブ (5) 老人大学 地区文化祭 (踊り、出品) 軍恩、松風園 (13) 通院 (20) 原稿、書き物 (10) 県歌書く (25) ※鳥代表の名 (12)	・日記が目目を浴び、島代表との交流が始まったためか、一日の記述が細かく書かれ、とても充実した生活との印象。 ・島代表が「信濃毎日新聞」に連載記事を執筆(「女の歳月」)。宗子さんのことも4月から6月まで記事で紹介。「4/27 女の歳月今日もくると楽しみに待つ」 ・趣味の書道で県歌「信濃の国」を書き表装して知人に贈り、色紙書きも続ける。 ・11月に転倒、手を痛めギブスの生活に不自由するが、市民文化祭に参加。
10年 (1998) 82歳	老人クラブ (2) 老人大学 軍恩 (3) 敬老会書き物 区文化祭 (踊り、出品) 通院 (31) 松風園 (10) 書き物 (14) ※鳥代表の名 (11)	・入山辺宮原神社御柱見立て、山出し (久さん総代)。 ・身体の不調に悩む。5月には日記の会2周年のつどいに、10月には信仰する木曾御嶽山の先祖供養(祖霊殿祭)に参加の希望があったが、いずれもかなわず。 ・11月の地区文化祭で踊った翌日高血圧で入院。お見舞いのお返しに悩む。 ・隣家のボヤを発見、宗子さんの知らせで7人がかりで消し止める。
11年 (1999) 83歳	老人クラブ (1) 老人大学 地区文化祭 (踊り、出品) 敬老会 軍恩 (2) 松風園 書き物 (19) 通院 (17)	・入山辺宮原神社御柱祭り。里曳き、柱立て (久さん総代)。 ・昭和57年から17年間続けてきた松風園への慰問を終了。 ・日記の会のメンバー10人が鳥代表とともに宗子さんを訪問。 「8/28 一日が忘れられぬ。思い出が忘れられぬ。思い出が心にいつまでも残る」
12年 (2000) 84歳	地区文化祭 (出品) 書き物 (16) 通院 (47) ※日記の会への思い	・誠さん 27 回忌。 ・昨年欠席した「太鼓の間踊り」が実現。「1/4 一生の宝として 85歳の記念になり」 ・家族に背負われて正月恒例の千手観音と東山観音参詣。 ・5月から9月にかけて腰痛で三回入院。秋に計画していた同級会実現ならず。 ・そのようななか、自宅では、書道、写経、原稿書き、書き物とひたすら筆を動かしている。 年末には200枚もの年賀状を手書きする。

連載 2

私の読んだ平野仁蔵日記

田中 順子

昭和二十七年

四十五歳(下)・安定し始めた生活

◆社会状況と労働環境

昭和二十七年。平野仁蔵さん四十五歳。結婚(十二月十七日)し、新生活をスタートさせた年である(前号で記述)。この年は講和条約の発効により日本が漸く独立を達成した年であり、朝鮮特需によって産業界は活気づき国民生活も次第に向上の兆しを見せるようになった。今回は平野さんの日記からこうした社会状況が窺える箇所を選んで読み進めてみた。

勤務先は「石川島造船」。好景気に

支えられ仕事は活況を呈していた。労働時間は八時―四時。八時―六時。八時―残業翌朝帰宅の三パターン。基本給は六千円弱で一万円稼ぐため残業が必要だった。冬は寒風吹きすさぶ甲板で、夏は暑い船底での労働で、相当きつい仕事だったが、厚生施設も揃い、風呂、食堂も完備し、経済的にも安定してきた。平野さんは日記と共にその日の収支を付けているが無駄遣いはなく預金もした。弟達からの借金申し込みにも快く応じている。

石川島造船にて40代平野仁蔵さん(右)



日記からの抜き書き

一月十二日 北風の冷たい一日。雪国では大雪に悩んでいるだろう。
一月二十日 六時残業で疲れて帰宅。弟の支度して置いた夕食の膳に座り空腹に飯を慌ただしくかき込む。
二月三日 再軍備。防衛隊増設とか。
二月十一日 産経新聞を買って電車の中で証券や商品市場の動きを一通り眼を通す。
二月十七日 啄木のうた「働けど働けど我がくらし楽にならず手をじつと見る」を地で行くような自分の生活。
三月十一日 「週刊朝日」を求む。
四月十日 「木星号」遭難。石川島の重役西

崎氏も死去。
四月二十日 パチンコ屋に入り二百円も使っ
てしまっ。
五月十七日 スト決行の指図あり。タバコの
味でその日の体調が分かる。
六月五日 青森から兄と姪上京。上野公園
宮城。日比谷。銀座を案内す。
六月二十日 戦後七年。古着の作業スポンを
買いに行く。上野泉隈のにぎわい。商中島高
七月二十日 古橋分進オリンピックで優勝。
七月二十八日 神田で英和辞典三百八十四円
求む。
八月六日 友人と会い、浅草「神谷バー」で

飲む。自分はペーパーミント少し。
十月一日 総選挙。帆足計に投票する。浅草
美人座でストリップを観る。郷里より縁談の
件、手紙あり。
十一月二日 見合いに備え三越本店にて背広
を注文。
十一月十九日 縁談の件で帰郷。叔父がどん
どん進め「樽入れ」まで済ます。
十一月二十四日 即答を反省。自分一生の失
策かもしれぬ。
十二月十七日 祝言のため茂木町へ。
十二月二十八日 新宿で妻の靴買う(二、
六〇〇円)。

平野仁蔵さん 昭和27年給与表

平野仁蔵日記より

S27/月	手取金額	特記事項
1月	9,914円	本給は5,845円
2月	記述なし	病欠と物入りで貧乏工員の悲哀切々と記す
3月	11,800円	部屋代1,200円 組合賃上げ要求
4月	10,194円	弟栄吉独立し家を出るので、これから大変
5月	10,929円	5/1 5,000円貯金、3,000円天引き
6月	15,999円	5,500円無尽を420円で落とす
7月	12,000円	7/8 中元手当要求、1ヶ月分9,000円で妥結
8月	記述なし	支出1万円を超した
9月	14,000円	無尽3口分2,000円支出
10月	14,000円	無尽5,000円落す
11月	記述なし	
12月	10,900円	

毎月28日支給日

注①給与は毎月28日支給。注②無尽…一定の掛け金を出して、組合員が一定期日に入札で優先的に融通の権利を得る仕組みの組合(頼母子講)。
注③この年の物価は、精米10kg620円。新聞購読料1ヵ月分2250円
(物価の文化史事典「展望社」)



平成二十五年一月一日(火)

初日の出七時四十五分を少し遅れて我が家のベランダから拜む。ここ数年二人で過ごす元旦が多くなった。味醂だけのお屠蘇で新しい年を祝う。

塩竈の友人の年賀状で二月大宰府で開催の万葉フォーラムのお誘いを受ける。

明日来客の水炊き鍋の準備と筑前煮を作る。年賀状すれ違い分十二枚投函。

一字日記 酎

平成二十五年二月四日(月)

NPO和装教育国民審議会のグループ会議に新調の魚沼裂き織紬のきものと、赤城紬の袋帯で行く。支部長欠席のため、委員十四名の会議進行を任せられた。

午後千葉校の認定証書きを依頼される。わたなべさんの邊という字のしんのように、点がふたつあるということを知った。人名の難しさをあらためて知る。

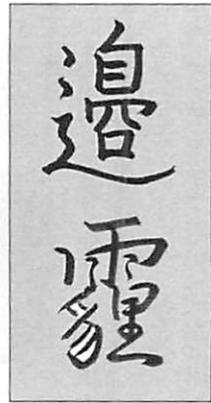
一字日記 邊

平成二十五年三月八日(金)

漢字検定一級問題に挑戦。蠶つちまが読めなかった。気象用語で黄砂の降る様子のことを言うぞうだ。

第八十二回自分史とどろきの勉強会の日。今回は文集第八集編集の総まとめ。話題の中心は第九集への意気込みに心強さを感じた。

一字日記 蠶



平成二十五年四月三日(木)

風速四十メートルを記録した。銚子・千葉も春の嵐どころではない。第三回NPO役員会。組織と運営方針の違なきものはかなり難しく、論議も喧々囂々。質疑応答も白熱。しかし会議が終われば、きものが大好きな人たちだから和気藹々。

一字日記 薫

平成二十五年五月十日(金)

真夏日の気温。自分史とどろきの特集号編集日。『時代を駆ける 吉田得子日記』が岡山でお里帰り展示会開催と聞き、会員の感想文を編集。特別に表紙を和紙で作った五冊を島先生に送る。

一字日記 漱

漱石『三四郎』のモデルといわれる独文学者小宮典隆氏にあてた直筆の手紙など、資料が遺族から福岡県のみやこ町に寄贈されたというニュースが報道された。

一字日記 漱

平成二十五年六月三日(月)

NPOグループ会議後、支部長のお

供で、県庁の教育振興課指導係へ表敬訪問。その後、市立幸町第二中学校へ七月の家庭技術科和装体験講座の打ち合わせに。

講師が話したとノートに記してあった。

一字日記 鷗

事務局に帰校後、一週間後の東葛・葛南地区の中学校家庭科担当者の研修会授業案と講義内容とその資料を提出し、快諾後、受講者百名分の印刷をして帰宅。

一字日記 県

平成二十五年七月二十八日(日)

父の命日。姉と妹と待ち合わせをして実家に墓参に行く予定だった。家を出る五分前夫が倒れて救急車のお世話になる。脳梗塞であった。T脳神経外科病院入院。午後娘が来てくれた。日記は翌日記入。

一字日記 梗

平成二十五年八月十二日(月)

T病院から、回復期リハビリステーション病院へ転院。これからの正念場で試験は乗り越えていかねばと思う。午後は一日早い墓参。福岡勤務の息子に代わり娘夫婦が頼みの綱。このところ疲労困憊。「もう少し冷静沈着な母と思った」と娘。

一字日記 転

平成二十五年十月十九日(土)

万葉講座の資料整理。四十一代の持統天皇の幼名は鸕野皇女(うののひめみこ)といい、三十八代天智天皇の娘である。

タレントの神田うのさんは、父親が持統天皇の幼名から命名した(?)と

「朝から驚かせてすみません」。娘の電話に足が竦んだ。庭に駐車してあったワゴン車に前の家の車が、門扉を破って突っこんできて後部が大破したというのだ。

夫の見舞いに病院へ二人で行く約束をしていたが一人で電車で行った。事故のことは夫には話せなかった。

一字日記 竦

平成二十五年十二月二十一日(火)

結婚して五十年目。歳末歳始を一人で過ごす。初めての経験。介護のための住宅改修が未完成なので退院は一月の予定。

今年の三大ニュース。夫の入院。私の脳ドック検診。「日記ろまん」六回完稿。新しい歳が更に飛躍の歳になりますよう。

一字日記 歳



(解説)

十回の拙い日記を読んで下さいまして東北から九州まで応援ありがとうございました。継続は力なり。今後も、一字日記という道を歩み続けたいと思います。



★『五十嵐日記 古書店の原風景』
〔五十嵐日記刊行会、笠間書院 2400円十税〕

昭和二十八年山形県から上京した十九歳の五十嵐智が、神保町古書店「南海堂」の店員になった。それから十年後に独立し早稲田で五十嵐書店を開業する。その直前までの日記だ。神保町の変化や雰囲気がよく伝わる。また地方から上京する当時の若者の日常生活もちよつとした記述から垣間見える。ちなみに日記刊行会のメンバーの一人・中野綾子さんは当云で日記目録を作成中。経過や苦労話を直接聞かせて頂く幸運に感謝。



★『関東大震災 記憶の継承』
〔関東大震災九十周年記念行事実行委員会、3000円十税〕

九十周年を迎えた関東大震災について、近年の研究および地域での埋もれた記憶の掘り起し運動の成果と意義を、現在の社会状況を踏まえて示す力作。中でも「千葉県での朝鮮人虐殺の解明と記憶の継承について」「記録映画『隠された爪痕』と『払い下げられた朝鮮人』」は特に興味深い。担当の

小園崇明氏は当会青年部部長代理。昨秋、博士号を取る気鋭の研究者である。版元の日本経済評論社社長の栗原哲也氏も八千代市住人。因縁を感じる一冊である。



★膨大な日記の寄託・寄贈が続く

三年前までは夫妻で活動に参加しておられた宮原正幸氏からお電話を頂いた。「大事にしてきた日記だが、思い切つて預けたい。取りに来てほしい」とのこと。昭和十二年から書き続けてきた一代の日記は『手紙が語る戦争』にも紹介させてもらった立派なもの。ご長男夫妻も同席で寄託書交換後、島宅に移った。



宮原さん夫妻(右)

いすみ市の木原薫さんより電話を頂く。祖父の日記類を寄贈したいとのこと。当会のホームページで活動を知った由。さっそく大正・昭和時代の沢山の日記や写真、勉強ノートが詰まった段ボール箱四つが届いた。筆者の百瀬勝氏は長野県松本市で教師をしておられた。

伝言板

★今後の予定

○四月八日(水) 定例会・史料班研究

八千代市男女共同参画センター 十三時より

○五月十四日(水) 定例会

五月二十八日(水)、六月三日(水)、十二日(金) つどいの準備

★「十九周年のつどい」 六月十三日(土) 十時〜十六時

八千代台男女共同参画センター五階ホール

十時〜十二時まで展示 一般公開/開場十二時/総会十二時半

つどい開演十三時。講演、トーク、日記展、懇親会

★ご寄付に感謝します

秋本シゲ子、伊藤幸一、伊藤久恵、石部日出夫、大橋愛子、長田松代、鎌田芳寛、折々の記、川名房子、世野美枝、関根栄、鈴木千代子、高橋書店、とどろき自分史、永島静香、二瓶幸子、松本喜美子、目黒早苗他の皆様(順不同、敬称略)

★島代表『親なき家の片づけ日記 信州坂北にて』(みずのわ出版、4200円十税 出版)

実家の片づけと畑の世話に千葉から信州まで通つて十年。その間の日記を九十枚の写真を加えまとめた。

希望者は島まで。著者特価4000円

陽記妃より スタッフだより

吉田得子さんの本が出版されてから少しづつその後の日記を読んでいます。自分と同年齢の得子さんに触れてみたいと思いました。ところが長年書き続けた日記は昭和三十六年五十冊目で終つてしまい、数年途絶えて八十三歳の時に家計簿に書かれた筆圧の弱くなった記述が最後の一冊でした。

昭和三十六年得子さん七十歳、昭和三十年ご主人が亡くなり独り暮らしになり、姪御さん達が泊まりに来たり度々訪ねてくれたりしていたようです。田畑の作業や木の葉かき、きのこ狩りは欠かさず、近所や知人が訪ねて来ては相談事

のり、地域の活動や婦人会の役員も積極的に継続しており、テレビでは大好きな野球の試合を楽しみ、長期間北海道旅行に出かけ、帰宅後は留守中の新聞を全部読んでいたようです。足の痛みが長引き通院時は知人のお見舞いを兼ねて

いました。「昼寝などして気楽に過ごす」という記述からは気ままな独り暮らしの様子が見えますが、年末の仕事は他人様の助けを借り、庭にはいつも花を

育てて、切つてはおすそ分けをし家の中にも生けていたのは、ご主人への手向

けだったのでしようか。(高崎 明子)